兵庫教育大学　研究紀要　第39巻　2011年９月　pp. 145－158

18世紀後期から19世紀における英国の不純物混和文化史序説（３）

An Introduction to the Cultural History of Adulteration in England between the Late Eighteenth and Nineteenth Centuries, III

大　嶋　　浩*
OSHIMA Hiroshi

前号の続きである。主に19世紀前半を扱っている。近代の純正食品運動の始まりを画することになる、アークムの『食品の不純物混和と厨房の毒』、及び挿絵付きの「ロンドンの諸改良」を中心に、『18世紀ロンドンの風習の逸話集』、『フィロソフィカル・マガジン』、『死神の所業』等を取りあげ、19世紀に入ってますます拡大していく不純物混和とその問題を取りあげる媒体の多様性の一端をあきらかにした。

キーワード：不純物混和，文化史，英国，18世紀後期，19世紀
Key words：adulteration, cultural history, England, the late eighteenth century, the nineteenth century

３．18世紀後期から1820年までの時期

⑷　『18世紀ロンドンの風習の逸話集』

19世紀に入って早々に、18世紀のロンドン事情を記した『18世紀ロンドンの風習の逸話集』（1st ed., 1808；2nd ed., 1810）と題された本が出版されている。その逸話集の中で言及されているのは、パンと酒類の不純物混和である。

パンに関しては、「ロンドンの悪党たちによって実行されている最も悪質な詐欺の一つが、パンの不純物混和である」と強く非難されている：「利潤を増やす、この嫌悪すべきやり方によって暮らし向きの向上をはかる卑劣漢は、あの有名なイタリアのトファーナ（Tophana）[1]と全く同様の邪悪な暗殺（アッサシン）者である。人間の形をしたかの悪鬼は、彼女の犠牲者たちを徐々に毒殺して彼女の使用者たちの悪意を満足させたのであった。だが、まわりの遅い毒をこね鉢の中に投げ込むパン屋はもっと悪い。なぜなら、パン屋は彼に味方する者たち、すなわち、彼の消費者たち、の身体組織を損なうからである」（Malcolm, vol. 1, 174-75）。

この逸話集の著者はさらに続けて、1757-1758年のパンの不純物混和問題を引き起こす口火となった匿名の小冊子『暴かれた毒、あるいは恐ろしい真実』（1757）から、パンの不純物混和に関する箇所を引用しながら、「石灰、チョーク、明礬等々」が混ざったパンは「たいていの病気の原因となる、さまざまな閉塞症」を引き起こすとして、「そのように悪用されたパン」がもたらす「有害な結果」を再説している（Malcolm, vol.1, 175-76）。すでに指摘したように、『暴かれた毒、あるいは恐ろしい真実』で非難されているパンの不純物混和に関しては、明礬に関する記述を除いて、当時からその非難の妥当性はコリンズやジャクソンによって問題視されていた。[2]にもかかわらず、この逸話集に再度引用されているところをみると、この小冊子は19世紀初頭においても依然として読者をひきつけていたようである。

酒類に関しては、建物の増加に伴うレンガの需要の増加ゆえに起こっていたレンガの不純物混和に関連して、『ロンドン・クロニクル』（1764年６月２日号）から、ビールやブランデー、ワイン類の不純物混和に対する嘆きが引用されている：「われわれは明礬入りのパン、糖蜜と水で醸造されたスモールビール［弱いビール］、モルトもホップも使用されていないポーターに、長い間、苦情をのべてきた。今では、最良のラム酒やブランデーの半分はウイスキー（malt spirits）に過ぎないということ、及び、イングランドで飲まれるポートワインの量は、アリカンテ［甘口ワイン］等の混ぜ物のおかげで、毎年の輸入量を二倍以上超過しているということを知らない者は誰もいない。そしてこの頃では、消費者のことを一切思いやることなく、買い占め、独占し、不純物混和された商品の値をつり上げる者たちの無慈悲な悪事を、どの家庭も嘆いている」（Malcolm, vol. 2, 390）。

ここで引用されている記事は、18世紀初頭の『タトラー』（1711年２月９日号）や『スペクテイター』（1712年４月25日号）で行われたワインの不純物混和批判から18世紀後期の『ハンフリー・クリンカー』（1771）における酒類全般の不純物混和批判に至る中間の時期に発表されたものと位置づけられる。これらの記事や記述を年代順に追ってゆくとき、18世紀における酒類の不純物混和の漸次の広がりとそれに対する関心（すなわち苦情）の高ま

＊兵庫教育大学大学院教育内容・方法開発専攻文化表現系コース
平成23年４月22日受理

りが見てとれよう。

(5)　『フィロソフィカル・マガジン』

(i)「有毒な茶葉について」

19世紀に入ると雑誌に不純物混和に対する投書等が掲載されるようになる。例えば、『フィロソフィカル・マガジン』第54巻第257号（1819年９月号）にはミスター・ジェイムズ・ミラー（Mr. James Millar）なる人物が「有毒な茶葉について」と題する投書を寄せ、以下のように述べて、最近暴露された茶に関する悪質な詐欺的行為（fraud）の有害さを一般大衆に公表することを要望している：

> 拝啓――比較的最近のこと、模造の茶葉を加工する常設の製造所が大衆の注目をひいた。これらの加工品を製造した一味は、その人工的に作られた茶を販売した、多くの売り主たちもろとも、正義の手を逃れることはなかった。リンボクと西洋サンザシの葉が茶の模造品に仕立てあげられ、それらの模造品が本物の茶として一般大衆によってこれまでも飲まれてきていたが、そうした詐欺的行為は、最近暴露された本物の売り物にならない茶くずを茶に仕立て上げる詐欺的行為と比べれば、比較的無害である。というのもの、後者の場合、その商品は健康に絶対的に有害なやり方で製造されていたからである。この陳述の証拠として、以下の事実を貴兄の雑誌を通じて大衆に知らせていただきたい。(Millar 219)

ミラーが公表を望んだ事実とは、ある一人の貧しい女性（雑役婦）が購入した緑茶に関するものである。その女性が一オンスの緑茶を購入し、その飲み物に、いつものように茶さじ一杯分の炭酸アンモニアを加えたところ、「鮮やかな青色」に変わった、という。驚いたその女性はその茶を購入した乾物屋に苦情を述べたが、その乾物屋は、有害な混ぜもののことを知らずに販売していたので、その疑わしい茶葉のサンプルを化学者のアークム（Mr. Accum）のところに持って行き、分析してもらった。すると、その茶葉には銅が含まれていることが判明したのであった。「その有害な茶は、その外観がまったく本物のヒーチュン茶（Hyson tea）の葉にそっくりであったが、その葉を熱湯で煮出すとすぐに溶けて細かい粉末になり、その部分だけがそのまま残り、その結果、その植物［ヒーチュン茶］の組織が認められたということがそのサンプルを調べた化学者によって指摘された。そしてそのことから、この有害な商品の製造者はヒーチュン茶の茶くず（その茶くずの販売は多くの茶の仲買人たちの正規の仕事となっている）を使用し、そしておそらく少量のゴム糊（粘漿剤）を使って、あらゆる点で本物のヒーチュン茶の外観の特徴を備えた合成物を作り出したという見解が導き出された」(Millar 219)。ミラーは「追伸」のなかで、「その茶を色付けするために使用された銅は炭酸塩の状態のものであり、緑青のようなものではない」、そして「緑青は茶葉に光沢を付与するという詐欺的目的には全く適用できないものである」というアークムの報告を伝えるとともに、最後に「申し上げるまでもなく、銅を調剤されたものは全て劇薬であります」と念を押している（Millar 219)。

1725年に茶の不純物混和を罰する法律が初めて制定されて以来、繰り返し、その処罰規定が強化されていた（1730-31年と1766-67年の法律）が、[3] それらの法律はあまり効果がなく、茶の不純物混和は依然として行われ続け、悪質なものになっていった。[4]『ハンフリー・クリンカー』の中で、ブランブルはロンドンでは野菜の色をよりよくするために半ペニー銅貨を入れて野菜を煮て、ロンドン市民の命を危険にさらしているとして強く非難していたが、その悪しき「改良」(Smollett 121) は、茶葉にも適用されていたわけである。[5]

(ii)「有毒な菓子」

このミラーの投書に続いて、同雑誌の翌月号（10月号）にはジョージ・マイルズ（George Miles）が「有毒な菓子」と題する投書を寄せている：

> 私は『フィロソフィカル・マガジン』の９月号の中で、有毒な茶葉に関する記事を目にしました。その記事を読むと、有毒な物質を砂糖ドロップに添加するという大変非難すべき慣行を思い出します。しばらく前、とある菓子屋の家に住んでいたとき、私は緑色のしゃれた砂糖菓子がサップ・グリーンをブランデーに溶かして色付けされているのに気づきました。さて、サップ・グリーンそのものはクロウメモドキの実の果汁から調合されるものであり、疑いなく無害な物質です。しかし、この色の製造者たちは過去何年間もの間、様々な色を作り出してきました。そのうちの幾つかは極端に鮮やかで、疑いなく銅の調合剤を添加することによって可能となるものです。
>
> これらの手段を用いて作られている砂糖菓子は銅で汚染されている明白な痕跡を持っているのがわかるでしょう。それゆえ、こうした菓子類を色付けするという慣行は禁止されなければなりません。しかも、それらの菓子の店主たちは、彼らによって使用されている物質がもつ有害な特質に気づいていないのですから。(Miles 317)

銅を使用した色付けによる汚染は、野菜から茶葉や砂

糖菓子類にまで及んでいる。ピクルスも銅で着色されていることが当然予想されるところであるが、この点に関しては、ミラーの投書のなかでも言及されていたアークムが翌年の1820年に出版した本『食品の不純物混和と厨房の毒』（*A Treatise on Adulterations of Food and Culinary Poisons*）の中で、ピクルスは緑色に見えるように銅で処理されていること、さらには、偽の中国茶も有毒な緑青や炭酸銅などで色づけされたサンザシの葉などから作られていることを暴露することになる（Accum 初版 306-09, 229-31, 238-42）。

3．1820年から1850年までの時期

(1) アークムの『食品の不純物混和と厨房の毒』

1770年頃から19世紀初頭の時期は近代的な化学の勃興期にあたる。キャベンディッシュ（Henry Cavendish, 1731-1810）やシェーレ（Karl Wilhelm Scheele, 1742-1786）、プリーストリー（Joseph Priestly, 1733-1804）、ラヴォアジェ（Antonie-Laurent Lavoisier, 1743-1794）等が輩出し、化学が急速に発展していくことになる。化学の興隆は不純物混和を一層巧妙にすることにもなったが、不純物混和の検出方法を発達させることにもなった。さらに書籍の出版や新聞雑誌の発達がこの傾向に拍車をかけることになる。知識や情報の伝達・獲得が一層容易になり、巧妙な不純物混和のやり方が暴露されると、そのやり方も検出方法も広く伝えられ、不純物混和を行う側にもそれを検出する側にもそれらの情報は益することになったからである。とはいえ、19世紀前半は巧妙な不純物混和が暴露されると、さらに巧妙なやり方が工夫されるというように、どちらかと言えば、様々に不純物混和を行う者を検出側が追っかけるという形であったが、世紀後半になると検出側が不純物混和側に追いつき、追い越すという形になり、不純物混和の取り締まり規制の強化等ともあいまって、蔓延していた不純物混和が次第に敗退していくことになる。

すでに見たように、18世紀には「化学薬品の技師」やパン医者と称される薬剤の知識を持った者たちが不純物混和に加担し、その不正を見つけるためにはジャクソンのような化学的知識と分析技術を持った専門家が必要となる時代になっていた。[6]「感覚器官法」（the 'organoleptic' approach）と称される、人間の五感（目や鼻や舌等）を使って食品の質を判断する、伝統的で常識的なテスト法ではもはや太刀打ちできない時代に突入していたわけである（Wilson 16）。19世紀に入り、摂政時代（1811-20）を迎える頃には、英国では市民の間で化学に対する関心が高まり、化学の公開実演等に観衆が殺到するようになる。ドイツ出身のアークムが『食品の不純物混和と厨房の毒』を発表した1820年頃、化学は流行の頂点にあった（Wilson 26）。アークムもたんに不純物混和に関する論文を発表するだけでなく、彼が化学教授をしていたロンドンのサリー・インスティチュートで化学の公開実演も行い、人気を博していた（図1）。彼はいわばロンドン市民の「お気に入り化学者」であった（Browne 1142；Wilson 9）。

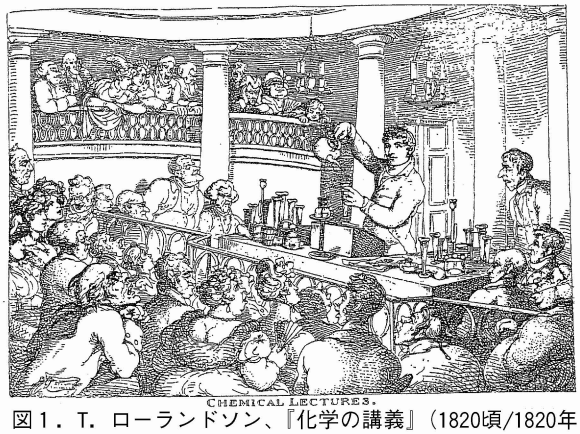
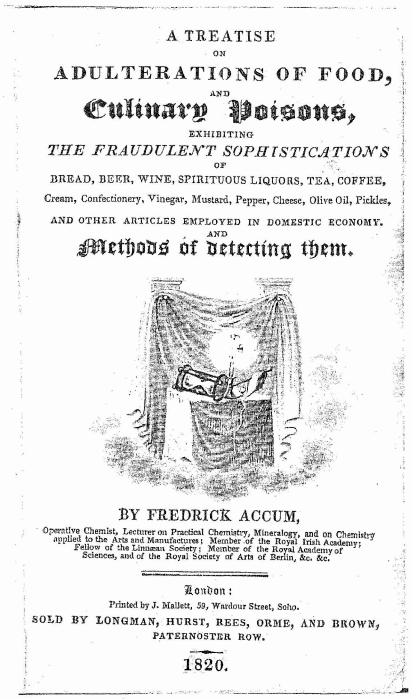


図1．T. ローランドソン、『化学の講義』（1820頃/1820年以前）．ロンドンのサリー・インスティチュートで聴衆を前にして化学の講義をするアークム。左下端の老人のポケットから「アークムの講義」と題された文書が顔をのぞかせている。（Browne 837）

専門の分析化学者としてアークムが行った飲食料品の分析の結果は、不純物混和の蔓延を疑問の余地なく立証するものであり、その事実を広く国民に、とりわけ中産階級の人々に知らせることになった。彼の著書の正式の長いタイトルは、『食品の不純物混和と厨房の毒に関する論考。パン、ビール、ワイン、蒸留酒、茶、コーヒー、クリーム、菓子類、酢、辛子、胡椒、チーズ、オリーヴ油、ピクルス等、家政で使用されている商品の詐欺的混ぜ物、及びそれらの検出方法を提示。』というものである。この本が大いに物議をかもしたのは、様々な飲食料品の化学的分析による不純物混和の蔓延の立証にその要因が求められるだけではない。アークムがその不正行為に従事した業者の「リスト」（Accum 初版 163-65, 176-78, 195-96, 206-09）を実名入りで公表し、利潤を求めて不純物混和を行う商人たちの貪欲さ―「利益を求める熱烈な飽くなき渇望」―を強く非難したからでもあった（Accum 初版 31）。

この本は刊行後一ヶ月以内に一千部を売り上げ、すぐに第2版が増補版という形で出版されている。初版の「ノーサンバランド侯閣下への献辞」の日付は1820年1月19日である（Accum 初版 ii）。第2版には「初版の序文」に続いて「第2版の広告」と題された一文が付されており、上述の初版の売れ行きのことや第2版でなされた増補事項、初版によせられた賛辞や誹謗等のことが簡単に述べられている。その「広告」の日付は1820年4月である（Accum 2版 xi）。初版が出版されてからわずか3ヶ月ほどで第2版が出版されていると見てよいであろ


A TREATISE
ON
ADULTERATIONS OF FOOD,
AND
Culinary Poisons,
EXHIBITING
THE FRAUDULENT SOPHISTICATIONS
OF
BREAD, BEER, WINE, SPIRITUOUS LIQUORS, TEA, COFFEE,
Cream, Confectionery, Vinegar, Mustard, Pepper, Cheese, Olive Oil, Pickles,
AND OTHER ARTICLES EMPLOYED IN DOMESTIC ECONOMY.
AND
Methods of detecting them.

BY FREDRICK ACCUM,
Operative Chemist, Lecturer on Practical Chemistry, Mineralogy, and on Chemistry applied to the Arts and Manufactures; Member of the Royal Irish Academy; Fellow of the Linnean Society; Member of the Royal Academy of Sciences, and of the Royal Society of Arts of Berlin, &c. &c.

London:
Printed by J. Mallett, 59, Wardour Street, Soho.
SOLD BY LONGMAN, HURST, REES, ORME, AND BROWN,
PATERNOSTER ROW.
1820.

図２．『食品の不純物混和と厨房の毒』初版（1820）の題扉．

う。さらに第３版が1821年、第４版が1822年に出版され、何千部も売れ続けた（“Accum, Friedrich”）。[7] 英国だけでなく、合衆国やヨーロッパの国々で版を重ね、近代の純正食品運動の始まりを画することになったと評されている（Browne 1033）。

初版の題扉には、カーテンのように垂れ下がる布を背景に、倒れている砂時計と火のともった蝋燭、及びその炎の周りを飛ぶ二匹の蛾と糸の垂れた糸の束らしきものの絵が付けられていた（図２）。[8] しかし、第２版以降ではその絵のデザインが、経帷子をまとった頭蓋骨を載せた器に変更されている。その器にはモットーとして「鍋には死［の毒］が入っています」（There is death in the pot）という聖句（列王紀略下 4. 40）が書かれている。その器の両側には、取っ手のようにそれぞれ一匹の蛇が巻きつき、その尾をその器の下部でその聖句を取り囲むように絡ませている。そして、その器の背景には墓石らしきものが倒れている（図３）[9]。同様の頭蓋骨がその本の表紙の図案にも見られる。その表紙の図案の中央には一匹の蜘蛛とその蜘蛛の巣に捕らえられた一匹の蝿が描かれ、その蜘蛛の巣の周囲を二叉に分かれた舌をチョロチョロと出しながら12匹の蛇がその尾を絡ませて取り巻いている。その天辺にいわゆる髑髏マーク（十字に交差した骨と頭蓋骨）が配され、そのマークの真下に例の聖句が記されている（図４；Darby 295）。題扉と表紙に載せられている、この聖句と頭蓋骨の絵は、食品の不純物混和がもたらす害悪を衝撃的に言い表し、図案化したものとして、読者に強烈な印象を与えたにちがいな

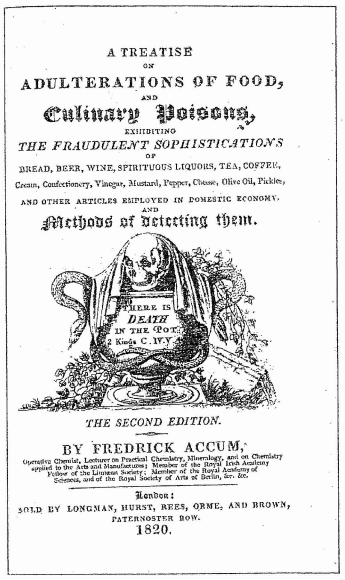

A TREATISE
ON
ADULTERATIONS OF FOOD,
AND
Culinary Poisons,
EXHIBITING
THE FRAUDULENT SOPHISTICATIONS
OF
BREAD, BEER, WINE, SPIRITUOUS LIQUORS, TEA, COFFEE,
Cream, Confectionery, Vinegar, Mustard, Pepper, Cheese, Olive Oil, Pickles,
AND OTHER ARTICLES EMPLOYED IN DOMESTIC ECONOMY.
AND
Methods of detecting them.
THERE IS
DEATH
IN THE POT.
2 Kings C. IV. V.
THE SECOND EDITION.
BY FREDRICK ACCUM,
Operative Chemist, Lecturer on Practical Chemistry, Mineralogy, and on Chemistry applied to the Arts and Manufactures; Member of the Royal Irish Academy; Fellow of the Linnean Society; Member of the Royal Academy of Sciences, and of the Royal Society of Arts of Berlin, &c. &c.
London:
SOLD BY LONGMAN, HURST, REES, ORME, AND BROWN,
PATERNOSTER ROW.
1820.

図３．『食品の不純物混和と厨房の毒』第２版（1820）の題扉．

い。その本とその本の著者アークムには、「鍋の中の死」（Death in the Pot）というあだ名が付けられさえした（Browne 1034；Jones 5）。そして、頭蓋骨（死神の顔）ないし骸骨（死神）は、これ以後、不純物混和批判ではおなじみの図像となっていく。

アークムが暴露した不純物混和の一部を以下に列挙しておこう。ワインは鉛糖で甘みを付けられ、ビールには表面の泡を増やすために緑礬が添加されている。トネリコ、リンボク、ニレの葉が銅板の上で巻かれ、色づけされて偽物の茶が作られ、焼いたり焦がしたり煎ったりしたエンドウ豆やインゲン豆等から「英国産のコーヒー」が作られている。胡椒には掃きよせた床の屑が混ざり、オリーブ油は芥子の実の油で薄められている。酢には酸味を増すために硫酸が加えられ、パンには白く見せかけるために明礬が使用され、カスタードは月桂樹の葉で有毒なものになっている。ピクルスは銅で鮮やかな緑色にされ、同様に菓子類は銅や鉛で色付けされている。菱形ドロップはパイプ白土から作られている等々。

第２版ではミルクやシナモン、アイシングラス、スペイン産甘草ジュース等の不純物混和が新たに追加され、彼が分析した飲食料は全体で20種類以上に及ぶ。当時の主要な飲食料品のほとんどにおいて多かれ少なかれ不純物混和がなされていたことが暴露されたことになる。

アークムは1820年末に王立研究所の図書の頁を盗み取った廉で告発され、その保釈中に彼は故国のドイツへ去ってしまう。彼が英国を去った正確な日付はわからないが、1820年12月23日から翌年の４月までの間のことである（Cole 140）。アークムは不純物混和を犯した業者を実名で公表したため、恨みを買い、脅迫を受けていた。この事件には彼の暴露を快く思わないものたちの陰謀があっ

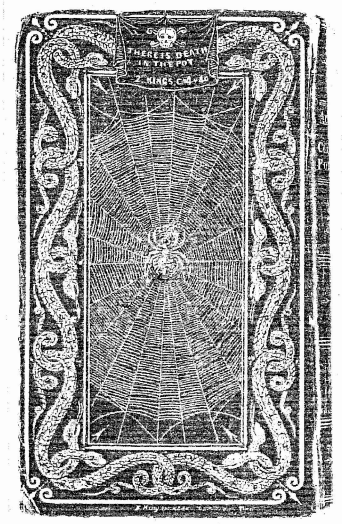


図4．『食品の不純物混和と厨房の毒』第2版（1820）の表紙．（Browne 1029）

たのではないかとも言われているが、真相ははっきりしない（Burnett 90；Wilson 42）。いずれにせよ、『食品の不純物混和と厨房の毒』を発表してからわずか一年ほどでアークムは英国を去り、彼がその第2版の「広告」の中で英国の不純物混和の悪行を暴露し続けるつもりであると約束した仕事は、結局、果たされずに終わってしまった。彼が英国で本格的に着手した不純物混和に関する仕事は頓挫したことになる。本の頁を破り取ったというアークムのスキャンダルとその彼が姿を消したことにより、不純物混和に対する英国民の興味・関心はかげっていくが、彼及び彼の本の影響は完全に消失したわけではなかった。

例えば、栄養学や経済学、化学の本や辞典に不純物混和が取りあげられるようになっていった。ユーア（Andrew Ure）の『化学辞典』（*A Dictionary of Chemistry,* 1821）、パリス（J. A. Paris）の『食事に関する論考』（*A Treatise on Diet*, 1826）、マカロック（J. R. McCullock）の『商業辞典』（*A Dictionary Practical, Theoretical, and Historical, of Commerce and Commercial Navigation*, 1832）などである。ユーアの本では「パン」の項目で、アークムの『食品の不純物混和と厨房の毒』等を引用しながら、パンの不純物混和が説明されている（“Bread”）。パリスやマカロックの本では、パンやコーヒー、エールとビール、ワイン等の不純物混和が解説されている（Paris 91-92, 120；McCulloch 11-12, 994, 1028, 1119, 1122, 1123, 1124）。[10]

1822年に「パン・エール法」が時代遅れだとして廃止されたが、1830年頃に新たに「パン法」（Bread Act）が制定され、小麦とパンの中に明礬を使用することを禁止し、その違反者には20ポンド未満の罰金が科された。さらに1836年の「パン法」は使用してよい材料のリストを含み、それ以外のものの使用を全面的に禁止した。これらの法律の制定にも、アークムの本が少なからず影響を与えたといって良いであろう Wilson 107；Jones 9）。

1830年と1848年に新たに不純物混和に関する本が出版されている。前者は匿名の冊子『暴露された死の不純物混和とまわりの遅い毒による中毒、あるいは鍋と瓶の中の病気と死』（*Deadly Adulteration and Slow Poisoning Unmasked*：*or Disease and Death in the Pot and Bottle*, 1830）である。タイトルにアークムと彼の本のあだ名ともなった、印象深い「鍋の中の死」という聖句を含み、明らかにアークムの本の影響が見てとれる。しかし、匿名の出版で、タイトル中に「死の不純物混和」や「まわりの遅い毒による中毒」という扇情的な語句を重ねて使用しているところからも窺えるように、この冊子は「より昔の伝統にのっとってセンセーショナルな暴露を目指したもの」で、アークムの本に比べると信頼性に欠ける（Burnett 90）。とはいえ、不純物混和に対する関心を復活させ、なおも不正混和が工夫され続けていることを示している点で重要なものといえる（Burnett 90）。ジンの中には濃硫酸と亜ヒ酸が、ビールの中には有毒なマチンの実とアヘンが混ぜられ、パンには粉末の石膏と焼いた骨と多量の砕かれたダービシャー・ストーンが使用されていること等々が指摘されている（Burnett 90-91）。ここにも『正直及び不正直に作られたパンの性質』（1757）以来おなじみの「焼いた骨」（骨灰）の神話が登場し、この神話の根強さが窺えて興味深い。

後者の本はミッチェル（John Mitchell）の『食品の偽造』（*A Treatise on Falsifications of Food*, 1848）である。ミッチェルは12年間不純物混和を研究してきた分析化学者である。アークムと同様の専門家の著作として、その本の信頼性は高い。

その本によれば、不純物混和はアークムの時代以来、大いに増加し、今や恐るべき割合に達していることは疑いないという。ミッチェルが検査したパンで明礬の入っていないものはなかった。使用された明礬の量は通常4ポンド塊のパンに100グレインの量であったが、時折明礬の結晶がエンドウマメ一個分の大きさになった。ゆでられたジャガイモがしばしばパンに使用されたが、時には炭酸マグネシウムと炭酸アンモニアが混ぜられた。小麦粉のサンプルにはチョーク、ジャガイモの粉、パイプ白土、火打ち石の粉末が混入し、小さなパンには明礬3グレインとチョーク10グレインが混入していた。ポーターには泡立たせるために硫酸鉄が加えられ、偽物茶が依然として製造され、コーヒーには常にチコリ、煎った小麦、紅土のような着色料、焼かれた馬の肝臓らしきものが混じっていて、混じり物のないコーヒーを買うことは実際不可能な状態であった（Burnett 91-92）。

(2)　「死神の記録簿」

19世紀になると、写真が発明され、ジオラマやパノラマ等の光学機器を応用した視覚的娯楽施設が人気を博し、挿絵入りの新聞雑誌や小説が登場してその発行部数を競うようになった。19世紀は視覚文化の世紀であったといってもよいであろう。この世紀に入ると、不純物混和の文献資料として、視覚的資料が目をひくようになってくる。それまでは専ら言語的資料しか存在しなかったが、19世紀になると挿絵画家や風刺画家が不純物混和を主題として取りあげるようになるのである。すでに見たように、アークムの本の題扉や表紙の絵は、食品の不純物混和がもたらす死を視覚的に巧みに図案化し、読者に強烈な印象を与えるものとなっていた。ここでは、そうした興味深い視覚的資料をいくつか見ていくことにする。

最初に取りあげるのは、画家・彫刻師のダグリー（Richard Dagley, d. 1841）が描いた一頁大の図版「死神の記録簿」（“Death's Register”）である（図５）。この図版は、ダグリーが自らデザインしてエッチングで彫刻した24枚の図版とそれらの図版に寄せられた様々な作家の文章が収められた作品集『死神の所業』（Death's Doings, 1826）の中の一枚である。まず図版があって、その図版を例解する文章が寄せられたのであり、その逆ではない。つまり、それらの図版は本来文章を例解するためのものではなく、図版に添えられた文章の方が、その図版の一つの例解となっているのである。

「死神の記録簿」は明らかにアークムの本が一つのインスピレーションとなってできた風刺漫画である。中央の、机の上で何やら記録をつけているらしい死神の商人の背後の壁に、「アークムのリスト」と大書された紙が貼られていている。残念ながらそのリストに何が書かれているかは判読できない。スティーブ（Earnet Walter Stieb）はこのリストをアークムの本の中の混ぜ物のリストを示唆していると解しているが、アークムが本の中で実名入りで公表した、ロンドンで不正を行った業者の「リスト」と解することもできよう。つまり、この死神が商う商品のリストではなく、彼の取引先のリストかもしれない。もっともこの図版に寄せられた韻文では、この死神は地方の商人で、ロンドンの取引店から商品を取り寄せている。そうであれば、彼が商う混ぜ物のリストと解するのが妥当であろう。いずれにせよ、飲食品に有毒な混ぜ物をする商人たちは、まさにこの図版に描かれているような、人間に死を持たらす死神に他ならない。

図版中には、この死神が扱っている混ぜ物として、向かって右端から、小麦粉に混ぜられる「焼き石膏と焼いた骨」の袋、「アルコール溶液　薬剤用アルコール」と表示された細首の大瓶、ビールやエールに混ぜる「コクルス・インディクス」（有毒なツヅラフジの果実）の樽、

DEATH'S REGISTER.

図５．Ｒ．ダグリー、「死神の記録簿」.

ワインに添加される「サル・サターン」（鉛糖）の籠、が描き込まれている。興味深いことに、この図版にも「焼いた骨」（骨灰）の神話が登場している。また、前景右端のショベルの上の「コロンビア」の銘刻は、合衆国の擬人化であるコロンビアへのアリュージョンとして、標準以下の規格外れのものは合衆国へ送られる慣行をほのめかしているらしい（Stieb 96；「Columbia」）。

前景左端のボードには「殺害は謀殺罪にはならない」（Killing no Murder）というモットーが見える。このモットーは、1657年にオランダで出版され、英国へ送られてきたパンフレットのタイトルに由来する。そのパンフレットには、護民官オリヴァー・クロムウェル（Oliver Cromwell, 1599-1658）を恐ろしい専制者だとしてその暗殺を呼びかけ、そのような殺害は愛国的功績だと擁護する内容が書かれていた。ウィリアム・アレン（William Allen）の作とされているが、本当の作者はクロムウェル軍の騎兵で、王党派に転向したセクスビー大佐（Edward Sexby, d. 1658）である。実際セクスビーは1657年にクロムウェルの殺害を企てたが失敗に終わった（“Killing no murder”；マルクス「注解」２）。後に、マルクス（Karl Marx, 1818-83）が『資本論』（1867）において、工場法に反対する工場主たちに関する一節の中でこのタイトル/モットーを再び引用し、利潤を求める工場主たちを非難することになる（マルクス 113）。この図版においては、このモットーは不純物混和に対する痛烈な風刺となっている。つまり、その不正がもたらす、徐々に体を蝕む、まわりの遅い毒による殺害は謀殺罪にはならないとして、その不正を犯す死の商人たちの貪欲さと非情さが鋭く批判されているのである。このモットーは、悪事を行う商人に対する批判にとどまらず、さらには、そのような不正を十分に取り締まらず、国民の命が

脅かされるままにしている政府への批判にまで及んでいるのであろうか？ 図版中にも、添えられた韻文にも、そのような政府への批判を明白に示唆するものは読み取れないように思われる。

最後に、この図版の一つの例解として添えられている韻文「死神（一商人）、彼のロンドンの取引先宛」を掲げておこう。作者はフォーブズ(W. J. Forbes)である。この韻文には、コクルスやカッシアや緑礬のエキス、緑青、ブラジル木、酒石酸塩、鉛丹等々、図版中に明示されていた物を遙かにしのぐ、多種多様な混ぜ物が列挙されている。

死神（一商人）、
彼のロンドンの取引先宛

1826年９月１日

郵便にて、貴兄の最新の送り状と手紙を受け取りました。
貴兄の積送品ほど申し分ないものはありません。
（小麦用の）焼いた骨は私が望んでいたものを遙かに上回るものでした。
そしてコクルス・インディクスのビールは極めて美味でした。

ところで、ついに我々があの長生きしている怪物、あわれな人間を滅ぼす
計画を思いついたのを嬉しく思います。
長首の緑のボトルで　私は君主を片付けましょう。

そしてペリゴールド風パテで公爵を。
しかしあわれな貧乏人はやっかいです。
というのも　奴らは私が奴らの顔をじっと見つめてもどうしても死なないのですから。

しかし、貴兄のおかげで、時勢が急速に変わり、
貧乏人たちは絞首刑にならずともやっかい払いされるでしょう。
エールとビールを飲む者たちに対しては　貴兄のコクルス、カッシアおよび緑礬のエキスほど適したものはありません――
この地では　それらを飲んで病気になる何百という者たちからエールと呼ばれ、
それらを飲んだために墓まで連れて行かれる多くの者たちからビールと呼ばれています。

奴らが茶に避難しても無駄でしょう――
その煎じ汁はとりわけ私が目を掛けているものなのですから。
リンボクの葉が茶になり――緑青がその色つやを付け――
その回りの遅い毒によって　きっと墓場行きになります。
コーヒーに関して言えば、その言葉が意味するのは砂と埃と砂利と焼いたエンドウ豆とインゲン豆以外の何物でもないということをフレデリック・アークムならば良くご存知です。

しかし、奴らが水だけを飲むと仮定してみましょう――
その味のない液体を飲み込むことによって
私を騙せると思っている愚か者たちの内の数人を
殺戮する方法がやはり見つかるだろうと思います。
――水だけを飲むのならば、ちくしょうめ
（下品な言葉を使った私の怒りをお許し下さい）、
奴らに鉛の水槽から死ぬまで
飲ませてやりましょう――私にとってそれが鉛糖の役を果たすことになるでしょうから！

より裕福な連中が、がぶ飲みにふけって
ポートワインを飲もうとするときには――貴兄が送ってくれたブラジル木[赤色染料]を利用することにしましょう。
しかし、遙かに風味の強いシェリー酒を好みそうな連中のために、
もっと多くの月桂樹の葉やスイートブライアを送ってもらいたいのですが！
ボトル類に対しては――ご存知のように、ボトルの内側に見事な酒あかを作るために
それらのボトルを貴兄が送ってくれた灰汁の酒石酸カリウムにすっかりまかせているところです。
月桂樹の水、オークのおが屑、消石灰が
ブランデーとラム酒に混ぜられるのにちょうど間に合いました。

ビール、茶、コーヒー、ワイン、ラム、ブランデー、水――
を飲む人皆の胃袋のために、我々は用意できたと思います。
そしてまた、私が食べる人皆の胃袋を毒することによって
同様の偉業をやってのけるのを貴兄は親切にも手助けしてくださるでしょう。
明礬、粘土、骨、ジャガイモが彼らのパンの中で混ざり、
彼らが食べるグロースターチーズはその濃い赤色を鉛丹から引き出すことになるでしょう！
しかしそのようなことを貴兄に申し上げる必要があるでしょうか？

私がお粗末なヒントを差し上げなくとも貴兄は何
　　をなすべきか、よくご存知ですから。
貴兄は乾物屋、醸造家、パン屋に必要なものを供給し、
すると彼らが今度は葬儀屋に必要なものを供給する
　　のです。

追伸――ついでながら、自由民の労働で作り上げられた砂糖を私に送らないよう、わが隣人である貴兄にお願い申し上げます、もし１ポンド分の中にもう少し少なめに塩を混ぜることができなければ――と申しますのも、図々しくも大衆はその新しい中国産の甘味料のあらを探そうとするのですから――そして、たとえ聖人たち[11] の砂糖を購入することを彼らが認めるしても、（よろしいですか、よくお聞き下さい）、30％ほども認めるのはやり過ぎだと彼らは言うのですから。[12]

草々
　　死神

⑶　「ロンドンの諸改良」

不純物混和を主題とした挿絵や風刺漫画等の中でかなり有名なものの一つと言えるのが、1845年版の『コミック・オールマナック』の中に掲載された「ロンドンの諸改良」（“London Improvements”）である。

オールマナックとは、一年間の月日や曜日に加え、祝祭日や行事、民衆の生活と関連の深い天候や運勢などの予言等を盛り込んだ書籍型の暦を指し、英国では16世紀の中葉頃から出回り始めたと言われている（松村　３）。種々の情報を盛り込んだオールマナックが17世紀後半頃から読み物として人気を博するようになり、すでに英国全体で毎年50万部を超える様々なオールマナックが売られていたという（松村４；コリー 23）。さらに1834年に印紙税が廃止されると、オールマナックが以前にも増して続々と刊行されるようになる。『コミック・オールマナック』もそうした時流に乗って1835年に創刊され、1853年まで毎年刊行された。[13] 19世紀英国を代表する挿絵・諷刺画家ジョージ・クルックシャンク（George Cruickshank, 1792-1878）が月々の季節の絵（一ページ大のエッチング図版）を、文はヴィゼテリー（James Henry Vizetelly, 1790-c.1838）が担当したが、ヴィゼテリーの死後には、サッカレー（William Makepeace Thackeray, 1811-63）やメイヒュー兄弟（Henry Mayhew, 1812-87；Horace Mayhew, 1816-72）らが筆を振るった。この本は創刊後たちまち大変な人気を博し、1840年にサッカレー が伝えるところでは20万部の売れ行きを誇ったという（松村6-12；Thackeray 45）。

「ロンドンの諸改良」は、不純物混和の研究書などにおいて、この図版だけが独立して引用されているのを見かける。しかし、本来は、「ロンドンの諸改良」と題した、４行６連からなる韻文の挿絵である。一頁のほぼ上半分をその図版が占め、その下半分をその韻文が占めている（図６）。とはいえ、この図版はその韻文の内容を視覚的に例解した単なるイラストではない。韻文の内容を受けて、それを更に発展させたものとなっている。[14] 韻文の内容から見ていこう。以下に試訳を掲げることにする。

ロンドンの諸改良

「改良」、万歳！　お前の忙（せわ）しない手は
中庭も路地も容赦はしない。
お前には　今や　何物も抵抗できない。
お前は　煉瓦とモルタルにとっては手強すぎる。

お前の前に　手すりも化粧タイルも
家も往来も　無差別に倒れ、ひれ伏す。
お前は　老セント・ジャイルズをすっかり変えて
　　しまい、
今では　セント・ポールのそばにあった彼のこと
　　が分かる人はほとんどいないであろう。

勇敢な指揮官、パリーとロスが
向こう見ずにも　恐るべき分厚い氷の塊を
横切ろうと
それぞれ　一、二度　試みたことがあった。

「行き止まり」と　「自然」が叫んだために、
ロスとパリーは故国へ退散した。
ロンドンの改良は　どの袋小路もものともせずに
切り進んで行く。

客間でも、工場でも、店でも、
公共の入り口でも、個人の戸口でも
窓でさえも、その改良は立ち止まることなく
粗暴に　どんどんと突き進んでいく。

改良は、また、
科学の手にふさわしい　ある仕事を遂行する。
砂を砂糖樽にあけ、
かくして　砂を砂糖に変えていく。

この韻文でまず目をひくのは比喩の多用である。「改良」も「自然」も「セント・ジャイルズ」も擬人化され、「手」が提喩としてその手の持ち主を表している。擬人化され、提喩的に「手」で表された「改良」の粗暴な活動力が、第１連と第２連で情け容赦なく攻め入る軍隊の

イメージを使って印象深く描き出されている。第１連の２行目で「容赦はしない」と訳した原文は “give no quarter” で、本来、この “quarter” は軍隊用語で降伏者の助命を意味する言葉である。先述の『18世紀ロンドンの風習の逸話集』の中で、建物の増加に伴うレンガの需要の増加ゆえに起こっていたレンガの不純物混和のことが言及されていたが、18世紀中葉の発展膨張しつつあるロンドンを示唆する逸話であったと言える。同様に、ここで歌われている、「忙しない手」をして、破竹の勢いで侵攻する「改良」の姿は、19世紀中葉の、急速に変貌を遂げているロンドンを示唆するものとして興味深い。

しかし、この「改良」の粗暴な軍隊は、「セント・ジャイルズ」の変身が示唆するように、専ら利潤追求の資本主義的合理化を目ざし、華美なうわべに隠れて悪弊をまき散らしていく。「セント・ジャイルズ」は、セント・ジャイルズ・イン・ザ・フィールド教会のある地区で、その教会の起源は1101年に創設されたハンセン病院附属の小礼拝堂にまで遡れる。この古い歴史を持つ教区は、18・19世紀にはロンドンの悪名高い貧民街と化し、泥棒、娼婦、貧民たちの巣窟に変貌していた。貧困層を相手とする多くのジン酒場（ショップ）があり、ホガースの『ジン横町』(1750-51)の舞台ともなった（「ホガースのロンドン」）。[15] その版画の遠景には、韻文にも出てくる近隣のセント・ポール教区の教会の尖塔が顔をのぞかせている。この版画におどろおどろしく描き出されているジン飲酒の悪弊を規制するため、1736年にジンの販売を抑制する「ジン法」が出されたが、あまり効き目はなく、その後もジン酒場は依然として盛況を呈していた。1830年、ジンの代わりにビールを奨励するため、ときの政府が「ビール法」を制定した。２ギニーの地方税を納めていれば、誰でも税務局からビール販売のライセンスが取得できるようにしたのである。すると、ビールに対抗するため、ジン酒場の主たちは、外観や内装に工夫を凝らし、女店員を雇い入れたりして店の雰囲気を一新し、ジン酒場をジン・パレス（gin-palace）という巨大酒場に変身させた。[16] その豪華な外観は周囲の貧民長屋と奇妙なコントラストをなしたが、貧民たちにとっては魅力的な歓楽の場となった（「ジン酒場繁盛記」；春山 109-12, 143-44）。「セント・ジェイムズとセント・ジャイルズ」と題された当時のストリート・バラッドにも、ジン・パレスの多さが、以下のようにヒューモラスに歌われている：「セント・ジェイムズには一つしかパレス［宮殿］がないが、本当に/セント・ジャイルズには至る所にジン・パレスがある」（Ashton 400）。

シヴェルブシュ（Wolfgang Schivelbusch）によれば、ジン・パレスでカウンターが使用され始めた。カウンターは客の流れの「交通革命」をもたらし、このカウンターのおかげで、ジン・パレスは「ベルトコンベア方式の飲酒工場」となった。ジンは何回にも分けてゆっくりと飲むものではない。いきなりぐいとやるのがジンの飲み方であり、その素早さは立ったままで飲むのにうってつけである。カウンターで立ったまま飲む、新しい飲酒形態は、客がその店の中で過ごす時間を大幅に短縮し、飲酒をスピードアップさせ、かくして大量の客を次から次へとさばくことを可能にしたのである。マンチェスターにあったジン・パレスでは一時間に400人以上の客をさばき、ロンドンの14の大規模なジン・パレスは一週間であわせて27万人もの集客を誇った。これは一つの都市の人口に匹敵する膨大な人数である（Schivelbusch 202-03；小林 91, 94-95）。

貧民街と化して荒廃したセント・ジャイルズのジン酒場からジン・パレスへの変身は、見事な「改良」の一例である。しかしその「改良」は「パレス」と銘打ってはいるが、実質はジンの悪弊をより大規模により効率よくまき散らす「飲酒工場」に過ぎず、貧民の悲惨さを一層募らせる結果を招くことになる。

「改良」の容赦なく侵攻する軍隊のイメージは第４連まで続き、最終連の第５連では、「忙しない手」が行う街路や建物等の改良にかわって、「科学の手」が行う改良、すなわち、飲食品の不純物混和が歌われている。取りあげられているのは、砂糖に砂を混ぜる不純物混和だけで、韻文はここで終わっている。

そして、この最後の一連で取りあげられていた不純物混和の問題が、この韻文の上に掲載されている挿絵の中でさらに展開されていく仕掛けになっている。その挿絵には、４人の人物が行う4種類の不純物混和が画面をほぼ４等分する形で描かれているが、向かって左側の上段に描かれた砂糖に砂を混ぜている乾物屋の絵が第５連の内容を例解するものとなっている。しかし、他の三つの絵は、韻文では触れられていない不純物混和を示し、韻文の「ロンドンの諸改良」を読み終えた読者は、この挿絵のなかにその「ロンドンの諸改良」の続きを見ることになる。

上段の乾物屋の右隣ではミルク売りの男がミルクを水で薄め、[17] 下段の左側ではパン屋が小麦に焼き石膏（plaster paris）と骨紛（bone dust）を混ぜ、その左側では酒屋/醸造家が「オールド・トム」というジンに硫酸を混ぜている。[18]「オールド・トム」の背後の樽はビールの樽である。その樽に刻印されている聖アンドリューの十字架（X字形）は麦芽汁の強度を表し、この印が多いほど強いビールであることを示している。この印は17世紀頃から一般に使われるようになったらしいが、その「X」がどの程度の強さを表すかの基準はないと言われている（春山 40-41）。

この「ロンドンの諸改良」の頁を開いた読者の目には、まず挿絵が目に飛び込んでき、そしてそれからその挿絵

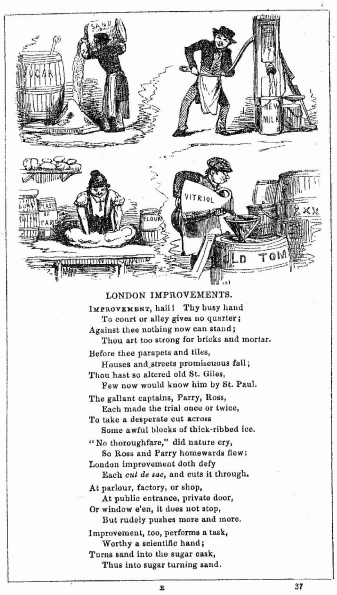


図６.「ロンドンの諸改良」.

の下に載っている「ロンドンの諸改良」というタイトルの付いた韻文に目を通すことになるであろう。その韻文を最終連まで読み進んだ読者は、その最終連の内容が、挿絵の上段の左側に例解されていることに気づくはずである。さらに、その挿絵を、ちょうど文章を読むように、上段の左側から右側、続いて下段の左側から右側へと見ていった読者は、今度はその最後の絵が韻文の第２連の内容に関連していることに気づくことになるであろう。その絵に描かれている「オールド・トム」は、セント・ジャイルズのジン酒場やジン・パレスを連想させ、それらの店で売られているジンが、この挿絵に見られるように、「改良」された品物、すなわち、不純物混和された粗悪品であることを想起させずにはいないだろうからである。それゆえ、セント・ジャイルズは二重に「改良」を受けていることになる。その地区のジン酒場に加えられた「改良」とその酒場の「オールド・トム」に加えられた「改良」である。また、「改良」により「オールド（old）・トム」は以前のものとは似て非なる、新たな（new）ものに変えられているといえるが、同様に、老（old）セント・ジャイルズも「改良」により新たな（new）ものに「すっかり変え」られている。挿絵の「オールド・トム」の “old” と韻文中の「老セント・ジャイルズ」の “old” は、単なる言葉（字面）の上でも、またそれぞれが「改良」を介して “new” なるものとの対比を含意するという点でも、呼応し合い、こだまのように響き合っている。

このように、挿絵の最後の絵は韻文の第２連の内容と呼応しあっているために、最後の絵を見終わった読者の思いは再び韻文の内容に連れ戻され、韻文の内容を再び思い起こすように促される。巧みに読者の読みを誘導して挿絵と韻文の間を循環させる仕掛けの妙があるといってよいであろう。

挿絵と韻文の連続性のほかに、この挿絵で目に付くのは、韻文とは対照的に、比喩的表現を排したその直截性であろう。それぞれの商人や製造人が文字通り、彼ら自身の「手」を働かせて不純物混和を行っている具体的な様子が何ら比喩に頼ることなく単純明快に描き出されている。とはいえ、その構図等には工夫が見られる。四等分された画面が対比の妙をなして構成され、この挿絵をなかなか興味深いものにしている。

まず、商品の対比がある。画面の向かって左半分は砂糖とパンという固体の商品、右半分はミルクとアルコール飲料という液体の商品という具合に、扱われている商品が対比的に配されている。各人物たちの姿勢と仕草にも巧みな対比がみてとれる。左上の乾物屋と右下の酒屋／醸造家はともに横向きの姿勢で注ぐ仕草をしているが、前者は後ろ横向きの姿勢で肩に担いだものを注ぐ仕草をしているのに対して、後者は前横向きの姿勢で脇に抱えたものを注ぐ仕草となっている。しかもすでに述べたように、前者の注ぐ物は固体であるのに対して、後者のそれは液体である。かぶっている物に注目すれば、前者は無帽、後者はハンティングキャップらしき帽子という対比が見てとれる。右上のミルク売りと左下のパン屋も同様である。ともに正面を向いた姿勢で両手で押す仕草をしているが、前者はハットをかぶり顔をあげた姿勢で薄ら笑いを浮かべ、腕を曲げた仕草であるのに対して、後者はキャップをかぶり顔を伏せた姿勢で腕を伸ばした仕草となっている。このように斜交いのもの同士が姿勢と仕草とかぶり物の細かな点で対比的に描かれているといえるが、一方、姿勢と仕草を大まかにとらえるならば、横向きと正面の姿勢、注ぐ仕草と押す仕草という対比が成立し、上述の斜交いのもの同士がひとまとまりとなって他の斜交いのもの同士と、いわば交差配列法的に対比をなしている。このように、輻輳した対比の網の目を通して、個々のものの詳細が相互に類似点と相違点を映しだし、実にヴァラエティーに富んだ構図が出来上がっていると言ってよい。

以上見てきたように、韻文における比喩のレトリックと挿絵における対比のレトリックが、この韻文と挿絵で構成された「ロンドンの諸改良」をコミカルなものに仕上げ、一方、韻文と挿絵の連続性が「改良」に対する諷刺の効果を高めている。この「ロンドンの諸改良」はコミカルな諷刺という『コミック・オールマナック』の持つ一つの特徴をよく示し、諷刺作品としてかなりよくできたものと言えるであろう。

諷刺という点から言えば、不純物混和が描かれている挿絵とタイトルを見ただけで、たいていの読者は即座にそのタイトルに込められた諷刺を――「改良」とは「改

悪」であることを――を読み取ったであろう。また、読者の中には、挿絵とタイトルをみて、『ハンフリー・クリンカー』（1771）中の、ブランブルによるロンドンの「改良」（improvement）のこだまを聞き取り、その本の中で批判されていたロンドンの様々な不純物混和を想起した者もいたに違いない（Smollett 121；大嶋「不純物混和文化史序説（２）」）。実際、「ロンドンの諸改良」は『ハンフリー・クリンカー』で展開された諷刺精神ないし批判精神を踏襲したものと見なせそうである。

韻文の第３連に注目したい。パリー（Sir William Edward Parry, 1790-1855）とロス（Sir John Ross, 1777-1856）は、北西航路の発見を目指した北極探検家である。彼らはそれぞれ一度ならず北西航路発見の探検に乗り出したが、この韻文で言及されているのは、ロス中佐を指揮官、パリー大尉を副指揮官として、イザベラ号とアレクサンダー号の２艦を率いて行われた1818年の探検であると思われる。一行がランカスター湾に到着したとき、指揮官であったロスは行く手を阻んでいる山々を視認したため、一行はランカスター海峡への侵入を諦めて引き返した。ロスはこの山々を海軍次官にちなんで「クローカー山脈」と命名したが、この「クローカー山脈」は北極特有の錯視現象によるもので、部下たちでさえもなぜ引き返すのか理解に苦しんだという。一行が帰国後、この噂が広まり、ロスは幻の「クローカー山脈のロス」として物笑いの種になった（谷田23-24）。

ロスとパリーの海軍遠征隊の侵入を阻んだのは「自然」（Nature）であったが、「改良」の軍隊の侵攻を阻むものはないのであろうか。「改良」の「忙しない手」と「科学の手」とは、挿絵に紛れもなく描き出されているようにそれを行う人間の手に他ならない。だとすれば、その手の持ち主たる人間こそ、「行き止まり」と叫んで「改良」を退散させることができることになる。ここでも、やはり「自然」がその侵攻を止めうるのである。ただし、その「自然」とは、人間の「自然」（nature）、すなわち、人間性に他ならない。ロスとパリーを退散させた「自然」（Nature）を介して、読者は最終的に人間の自然へと目を向けさせられるのである。

このように、「ロンドンの諸改良」においても、『ハンフリー・クリンカー』においてと同様、不純物混和を含む悪しき「改良」を行う商業社会に対する批判は、それらの「改良」を行う行為者/主体たる人間の精神に対する批判となっている。薄ら笑いを浮かべながらミルクに水を加えている悪人の姿に巧みに描き出されているように、悪しき「改良」を行う者たちの人間性の堕落が最終的には批判されているのである。その意味では、スモレットも「ロンドンの諸改良」の作者（挿絵画家と韻文作者）も共に、商業社会における人間性を諷刺するモラリストであったといえる。

最後に、「ロンドンの諸改良」にもパンに「骨粉」を混ぜるという神話が顔を出していることに目を止めておきたい。なお、砂糖に砂を加えるという神話もここには登場している。この後者の神話は、やがて世紀中葉にハッスル（Arthur Hill Hassall, 1817-94）が顕微鏡を駆使した分析を行い、その神話が間違いであることを明らかにすることになる。

（次号に続く）

注

＊前々号の「18世紀後期から19世紀における英国の不純物混和文化史序説（１）」の注13において、「ジョージ・クルックシャンクの挿絵」とあるのを「挿絵」に訂正願います。詳しくは、本稿の注14を参照。

1　最初パルモアで、後にナポリで暮らした毒殺者。彼女は「トファーナ水」という名で知られた秘毒の点滴薬を、夫を換えたいと思っている女たちに恵み与えた（ベックマン280）。

2　大嶋「不純物混和文化史序説（１）」：53参照。

3　大嶋「不純物混和文化史序説（１）」：52参照。

4　1810年代末、特に1818年と1819年は、茶の不純物混和がロンドンで問題化し、話題となった時期であった。この時期の『タイムズ』紙（*The Times*）には、茶の不純物混和にまつわる記事や広告が目につく。例えば、1818年３月５日号では、「首都の茶販売業者の10分の９が多かれ少なかれ」不純物混和された茶を売っているという警察の報告を伝えている。また、同年の11月14日には、茶の不純物混和を諷刺したクルックシャンクの諷刺画（*T Trade in Hot Water! Or a Pretty Kettle of Fish*）が出版されている（Cohn 344）。

5　大嶋「不純物混和文化史序説（２）」：85, 88-89参照。

6　大嶋「不純物混和文化史序説（１）」：53；大嶋「不純物混和文化史序説（２）」83参照。

7　1822年に出版された第４版の「広告」には、この本は発行後１年以内に４千部を売り上げたため、再度印刷することになったと記されている（Accum　4版 ix）。

8　二匹の蛾が危なげに蝋燭の炎の周りを舞っているが、その蝋燭立ての足下には、すでにその炎の犠牲となった一匹の蛾の羽が認められる。炎の周りを舞う蛾は死の危険を象徴している（Stieb 163）。また、砂時計と蝋燭は伝統的にウァニタス（この世のはかなさ）の典型的なエンブレムである。それゆえ、背景の布地は、はっきりしないが、単なるカーテンではなく、ウァニタスないしは死のエンブレムをなす経帷子ないしは棺衣であるかもしれない。なお、スティーブは向かって右端にあるものを「生命の糧」（a staff of life）と解しているが、どうもパンらしきものには見えない。おそらく人間の寿命と運命を司る運命の３女神（Three

Fates）が紡ぎ、割り当ての長さに測り、裁断する「生の糸」（the thread of life）を象徴する、紡がれた糸の束ではないだろうか（Stieb 163；“Three Fates”）。このように、この題扉の絵については不明な点がいくつかある。ご教示いただければありがたい。

9　背景として、器の足下に墓石が器の周りには植物（草や花あるいは蔓草）が、描かれている。描かれている植物が何なのか、不明である。ご教示いただければありがたい。ただし、西洋において植物、特に野の植物は、聖書などを典拠として（「ヨブ記」14：1-2、「詩篇」90：5-9、「イザヤ書」40：6-8）、ウァニタスを象徴する。この図案に見られる野外の植物のモティーフも、頭蓋骨や経帷子と同様、ウァニタスのエンブレムと解せるであろう。

10　マカロックの1841年版では茶の不純物混和の記載がかなり増補されている（629-30）。

11　「聖人たち」（the saints）とは、奴隷制に反対し、聖人たちと呼ばれたクラッパム派のこと。クラッパム派は、およそ1780年から1830年頃、ロンドン郊外のクラッパムを中心に活動した英国国教会内福音主義者の小グループで、奴隷貿易の廃止、奴隷制の廃止等を主張。ウィリアム・ウィルバーフォース、レズリー・スティーブン、ザカリ・マコーレーらが主要メンバーであった（Altick 180；「Clapham Sect」）。

12　英国では、1790年代初頭に奴隷制廃止を求めて、西インドの奴隷によって作られた砂糖の不買運動が起こり、1792年にピークに達した。その後、1820年代にElizabeth HeyrickやLucy Townsendといった女性活動家たちの働きによって、その砂糖ボイコットが復活をみる（Hochschild 324-28）。「追伸」はその復活し始めた砂糖ボイコットを示唆する内容となっている。

13　価格は当初２シリング６ペンスであった。1848-49年に小型化して価格も１シリングに変更されたが、この変更も期待された販売拡大にはならず、1850年に再び大きくして価格も２シリング６ペンスに戻った（“Preliminary”）。

14　『コミック・オールマナック』は、その本のタイトルにたいてい「ジョージ・クルックシャンクによる12枚の挿絵付き」と明記されているように、クルックシャンクの絵を呼び物の一つとしており、実際、クルックシャンクの絵がこのオールマナックの人気に大きな貢献をしていた。もっともクルックシャンクの絵は必ずしも常に12枚であったわけでない。年度によってその絵の数は変化している（松村9-13）。後に、２巻本として出版されたときには、タイトルに「ジョージ・クルックシャンクとその他の画家たちによる何百もの挿絵付き」と明記されている（*The Comic Almanack*）。クルックシャンクのカタログ・レゾネには、「ロンドンの諸改良」は挙げられていない（Cohn 61）。「英国の不純物混和文化史序説（１）」の注13において、筆者はこの「ロンドンの諸改良」の挿絵を「ジョージ・クルックシャンクの挿絵」と述べたが、この挿絵はクルックシャンクの手になるものではないようである。その注は訂正が必要である。この場を借りて、その不注意をお詫び申し上げる。目下のところ、筆者には「ロンドンの諸改良」の挿絵画家と韻文作者は不明である。今後の更なる調査が必要である。

15　この教区内のセヴン・ダイアルズ（Seven Dials）とルッカリー（the Rookery）と呼ばれた地区が、貧民街としてロンドンで最も悪名高かった。前者は教会近くの七差路の交差点で、泥棒や貧しい物売りたちの住処であった。後者は教会とグレイト・ラッセル・ストリートの間の地区で、そこでは４軒に１軒がジンを売る店であったという（“St Giles in the Fields”；「SevenDials」；「Gin Lane」）。

16　『オックスフォード英語辞典』によれば“gin-palace”の初出は1834年である。

17　この場合、ミルクは二重に不純物混和されていることになる。すでに『ハンフリー・クリンカー』の時代でも、ロンドンの飲料水はあらゆる種類の汚れに晒された開放導水管が供給する水、ないしはウエストミンスターの汚物で充満したテムズ川の水であり、汚染が進んでいたわけであるが（Smollett 119）、19世紀前半にこの汚染が急速に悪化していった（大嶋「英国の不純物混和文化史序説（２）」：82）。ミルクは、すでに不純物混和された水を使って、さらに不純物混和されていることになる。

18　『オックスフォード英語辞典』は“Old Tom”を俗語でジンの呼び名であると説明している。その初出は1823年である（“Tom, n.1,” OED）。また、オールドトムジン（オールド・トム）は「ロンドンジンに１～２％の砂糖を加え、わずかに甘くしたもの」であると説明している本もある（外池 47, 123；“Old Tom Gin”）。ジンを指すのかジンの一種を指すのか曖昧である。ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）の『ボズのスケッチ集』（*Sketches by Boz*, 1836）の中の「ジン酒場」（“The Gin Shop”）には、「豪華なジン酒場」（すなわち「ジン・パレス」）の店内の側廊に置かれた大きな酒樽には「『オールド・トム、549』とか『ヤング・トム、360』とか『サムソン、1421』といった文字が記されている――数字は、どうやら容積のガロンを示すものらしい」という記述がある（184-85）。クルックシャンクによるその挿絵「ジン酒場」では「オールド・トム 549」や「谷間のクリーム 360」、「へべれけ 696」と書かれた大樽がずらりと並んでいる（図７）。「谷間のクリーム 360」と「へべれけ 696」は混成酒

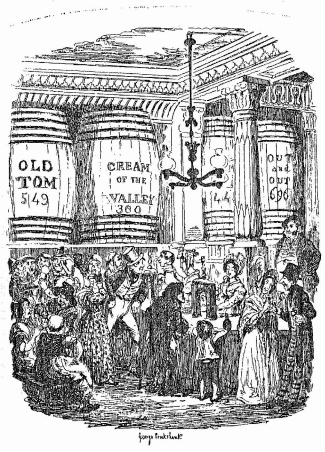


図7．G. クルックシャンク、「ジン酒場」.

である(183)。クルックシャンクが1829年に描いた諷刺画「ジン酒場」(“The Gin Shop”) には「オールド・トム」と大書された棺型の大樽がこの諷刺画を見る者の目を引く(図8)。ディケンズやクルックシャンクを見る限り、オールド・トムは当時のジンの代表的な種類であったといってよいようである。

図8．G. クルックシャンク、「ジン酒場」.（Schivelbusch 158）

引用文献

*本稿における引用文の訳は、邦訳があるものは参考にしたが、適宜変更を加えた。

“Accum, Friedrich.” 19 Apr. 2011 〈http：//en.wikipedia.org/wiki/Friedrich_Accum〉

Accum, Frederick. *A Treatise on Adulterations of Food, and Culinary Poisons*. London：Longman, 1820.

---. *A Treatise on Adulterations of Food, and Culinary Poisons*. 2nd ed. London：Longman, 1820. 19 Apr. 2011 〈http：//www.archive.org/stream/treatiseonadulte00accurich#page/n5/mode/2up〉

---. *A Treatise on Adulterations of Food, and Culinary Poisons*. 4th ed. London：Longman, 1822. 19 Apr. 2011 〈http：//books.google.com/〉

Altick, Richard. *Victorian People and Ideas：A Companion to the Modern Reader of Victorian Literature*. New York：Norton, 1973. [『ヴィクトリア朝の人思想』. 要田圭治、大嶋浩、田中孝信訳. 音羽書房鶴見書店、1998.]

Ashton, John. *Modern Street Ballads*. London：Chatto, 1888.

Browne, C. A. “The Life and Chemical Services of Frederick Accum.” *Journal of Chemical Education* 2 (1925)：829-51, 1008-34, 1140-49.

Burnett, John. *Plenty and Want：A Social History of Food in England from* 1815 *to the Present Day*. 3rd ed. London：Routledge, 1989.

「Clapham Sect」.『英米史辞典』. 松村　赳、富田虎男編著. 研究社、2000.

Cohn, Albert. *George Cruikshank：A Catalogue Raisonné of the Work Executed during the Years* 1806-1877 *with Collations, Notes, Approximate Values, Facsimiles, and Illustrations*. London：The Office of “The Bookman’s Journal,” 1924.

Cole, R. J. “Friedrich Accum (1769-1838)：A Biographical Study.” *Annals of Science* 7.2 (1951)：128-43.

「Columbia」.『英米故事伝説辞典』. 増補版. 冨山房、1972.

Darby, William J. “The Food Protection Committee：A Non-Government Organization.” *The Journal of Nutrition* 123 (1993)：294-98. 18 Apr. 2011 〈http://jn.nutrition.org/content/123/2_Suppl/294.full.pdf+html〉

Death’s Doings. London：Andrews, 1826.

Dickens, Charles. *Sketches by Boz*. The Oxford Illustrated Dickens. 1966. Oxford：Oxford UP, 1991.[『ボズの素描集』. 田辺洋子訳. あぽろん社、2008.]

「Gin Lane」.『ロンドン事典』. 大修館、2002.

Jones, E. Gabriel. *Food Fakes：Ancient and Modern*. London：Institute of Chemistry of Great Britain and Ireland, 1930.

“Killing no murder.” *Brewer’s Dictionary of Phrase and Fable*. 14th ed. New York：Harper, 1989. [『ブルーワー英語故事成語大辞典』. 加島祥造訳者代表. 大修館、1994.]

“London Improvements.” *The Comic Almanack for* 1845. *The Comic Almanack*. Vol. 4. 本の友社、1998.

Malcolm, James Peller. *Anecdotes of the Manners and Customs of London during the Eighteenth Century*. 2nd ed. Vol. 1. 1810. Breiningsville, PA：Nabu, 2010.

---. *Anecdotes of the Manners and Customs of London*

during the Eighteenth Century. 2nd ed. Vol. 2. London：Longman, 1810. 17 Apr. 2011 〈http://jn.nutrition.org/content/123/2_Suppl/294.full.pdf+html〉

McCulloch, J. R. *A Dictionary Practical, Theoretical, and Historical, of Commerce and Commercial Navigation*. London：Longman, 1832.

---. *A Dictionary Practical, Theoretical, and Historical, of Commerce and Commercial Navigation*. Vol. 2. Philadelphia：Thomas Wardle, 1841.

Mintz, Sidney W. *Sweetness and Power：The Place of Sugar in Modern History*. New York：Viking, 1985.［『甘さと権力：砂糖が語る近代史』．川北　稔・和田光弘訳．平凡社、1988.］

"Old Tom Gin." 20 Apr. 2011〈http：//en.wikipedia.org/wiki/Old_Tom_Gin〉

Paris, J. A. *A Treatise on Diet*. Philadelphia：Robert H. Small, 1826.

"Preliminary." *The Comic Almanack*. First Series, 1835-1843. London：Hotten, N.d.

"St Giles in the Fields：History." 19 Apr. 2011〈http://www.stgilesonline.org/heritage-resources/history.php〉

Schivelbusch, Wolfgang. *Tastes of Paradise：A Social History of Spices, Stimulants, and Intoxicants. Tr. David Jacobson*. New York：Vintage, 1993.［『楽園・味覚・理性：嗜好品の歴史』．福本義憲訳．法政大学出版局、1998.］

「Seven Dials」．『ロンドン事典』．大修館、2002.

Smollett, Tobias. *The Expedition of Humphry Clinker*. Ed. Lewis M. Knapp. Rev. Paul-Gabriel Brouc?. Oxford：Oxford UP, 1984.［『ハンフリー・クリンカー』．長谷安生訳．第１、第２・３巻．出版社名なし、1972-73.］

Stieb, Ernst W. *Drug Adulteration：Detection and Control in Nineteenth-Century Britain*. Madison：U of Wisconsin, 1996.

Thackeray, William. *An Essay on the Genius of George Cruikshank by William Makepeace Thackeray Reprinted Verbatim from "The Westminster Review." Ed. W. E. Church*. London：Redway, 1884.

The Comic Almanack. First Series, 1835-1843. London：John Camden Hotten, N.d.

The Oxford English Dictionary. 2nd ed. CD=ROM Version 3.0. 2002.

"Three Fates." A Dictionary of Subjects and Symbols. By James Hall. Rev. ed. New York：Harper, 1979.［『西洋美術解読事典』．高階秀爾監修．河出書房新社、1988.］

Ure, Andrew. *A Dictionary of Chemistry, on the Basis of Mr. Nicholson's*. Vol. 1. Philadelphia：Robert Desilver, 1821.

Wilson, Bee. *Swindled：From Poison Sweets to Counterfeit Coffee―The Dark History of the Food Cheats*. 2008. London：Murray, 2009.［『食品の偽装の歴史』、高儀　進訳、白水社、2009.］

コリー、リンダ．『イギリス国民の歴史』．川北　稔監訳．名古屋大学出版会、2000.

「ジン酒場繁盛記」．『ロンドン事典』．大修館、2002.

小林章夫．『図説ロンドン都市物語：パブとコーヒーハウス』．河出書房新社、1998.

谷田博幸．『極北の迷宮』．名古屋大学出版会、2000.

外池良三．『世界の酒日本の酒ものしり事典』．東京堂出版、2005.

春山行夫．『春山行夫の博物誌 VI：ビールの文化史２』．平凡社、1990.

ベックマン、ヨハン．『西洋事物起源(一)』．特許庁内技術史研究会訳．岩波書店、2004.

「ホガースのロンドン」．『ロンドン事典』．大修館、2002.

松村昌家、『The Comic Almanack 別冊解説』．本の友社、1998.

マルクス．『マルクス＝エンゲルス全集』．第25巻第１分冊．大内兵衛、細川嘉六監訳．大月書店、1966.

*本稿は平成20-22年度科学研究費補助金［挑戦的萌芽研究］による研究成果の一部である。